令和2年度　北九州市立　高須中　学校・園　学校評価報告書（自己評価）

〈様式　1〉

学校教育目標	豊かな心・優れた知性・健やかな体をもった、人間性豊かな生徒の育成

《本年度の重点目標》

《重点目標1》	授業に意欲的に取り組む生徒を育成する。（授業方法の改善や指導教材の工夫・ICT機器の利用）
《重点目標2》	思いやりの心を持ち、相手の立場で物事を考えることができる生徒を育成する。（全領域における心の教育）
《重点目標3》	生徒の心のよりどころとなる学級学年学校を作り、不登校生徒を減らす。（全職員による、個別指導や相談、支援の充実）

◆記入にあたっての留意事項

- ○　「北九州市子どもの未来をひらく教育プラン」の実現に向けた指導のポイント＜重点取組（施策）編＞に示している重点項目から各学校・園で重点においた取組について記載すること
- ○　取組については、各学校の重点目標達成のための方策に応じて設定すること
- ○　小・中学校においては、今年度選択したスクールプランの様式（新旧様式、または学校独自の様式）の「取組」を位置付けること
  旧様式：「学力向上に関する取組」「体力向上に関する取組」「『長欠・不登校対策』『業務改善』に関する取組」「その他学校 独自で設定した取組」を 必ず位置付けること
  新様式：「子どもの学びに関すること」「子どもの心の育ちに関すること」「子どもの体力に関すること」「『長欠・不登校対策』に関すること」「『業務改善』に関すること」
- ○　評価の例　A…目標を十分に達成できた　B…目標をほぼ達成できた　C…あと少しで目標が達成できた　D…目標達成までいかなかった

取組	評価項目	評価項目についての重点的取組	評価	○成果と◆次年度に向けた改善点
学力向上に関する取り組み	【授業改善①】 ＜学校生活アンケート＞ 「授業に意欲的に取り組み、何かを学び取ろうという気持ちをもつことが出来ましたか」について肯定的な回答をした生徒の割合【80%以上】 【授業改善②】 〈学校生活アンケート〉 「授業では自分の考えや思いをことばや文にして表現することが出来ましたか」について肯定的な回答をした生徒の割合【70%以上】	○それぞれの教員が自己の特性を生かした授業形態を構築し、生徒の興味意欲関心を引き出せるように努める。 ○タブレットや大型テレビなどの機材を利用した授業づくりのための研修会を定期的に開催する。（学力向上担当教員を中心に） ○前後期に一度ずつ相互授業参観週間を設け、同教科や他教科の授業を参観し、意見を交換する。 ○班活動などで効果があった授業を紹介する。（学力向上担当部）	B	○生徒がそれぞれの授業の特徴をよく理解し、自主的に授業に取り組むようになり集中力がアップした。 ○他の教員の授業をたくさん知ることで、自己の授業改善に努力する姿が伺えた。 ○パワーポイントやデジタル教科書を使って授業を行う先生が増えた。 ◆持ち時間の多い教員が多く、授業参観の時間がうまく取れないことがあった。 ◆タブレットなどのICT機器の利用については、まだまだ多くの研修が必要である。 ◆コロナウィルス感染拡大防止のために、班活動や実験実習に制限がかかり、思い描くような教育活動ができないことがあった。
心の育ちに関する取り組み	【全領域における心の教育】 ＜学校生活アンケート＞ 「家族や友人などに対して、思いやりをもち優しい声掛けをすることが出来ましたか」について肯定的な回答をした生徒の割合【80%以上】 〈学校生活アンケート〉 「家族や先生、友人はあなたの良いところを認めてくれていますか」について肯定的な回答をした生徒の割合【70%以上】	○朝の健康観察の際、「おはよう」の声掛けを徹底して行うことを共通認識し実行する。（全職員） ○教科等の授業の中で「誰一人取り残さない」授業を目指し、「支え合い、高め合う」集団作り授業作りに取り組む。 ○教職員が「ありがとう」や「ごくろうさん」など相手に感謝することばを意識して多く使うように心がける。 ○道徳の授業を充実させ、お互いの良さに気づき、それを尊重できるような人間関係作りを目指す。	B	○挨拶においては、次第に生徒の方から声を出して行うことが出来るようになってきている。 ○「ありがとう」などの感謝の言葉を多く使うことで和やかな雰囲気ができ、生徒教員共に笑顔が多くみられるようになった。 ○コロナウィルス感染拡大防止のための清掃活動や給食配膳活動などを積極的に行う姿勢が見られるようになった。 ○授業中に友人の発言を尊重する風土が育ちつつある。 ◆道徳の授業が、回数が少ないこともあるがまだ軌道に乗っていないので、さらに推進していく必要がある。
体力向上に関する取り組み	【運動習慣の構築　スポーツへの興味関心の育成】 ＜学校生活アンケート＞ 「体育の授業は楽しいですか」について肯定的な回答をした生徒の割合【90%以上】 〈学校生活アンケート〉 「オリンピックをはじめ、各スポーツの話題に興味がありますか」について肯定的な回答をした生徒の割合【80%以上】	○保健体育科の授業で、運動習慣構築の重要性や生涯スポーツのもつ意義を理解させる。 ○体育の授業では、十分な運動量を確保させるとともに、振り返りの時間を設定し、自分や友人の良さや改善点などを考えさせる。 ○運動能力テストを実施し、目標を設定させることで自己の体力向上に興味をもたせる。 ○オリンピックパラリンピックをはじめ、プロ、アマを問わず多くのスポーツの話題を提供し、スポーツに対する興味関心を深めさせる。	C	○授業内容や指導方法の工夫改善を図ることで生徒が体育実技に興味を持ち、授業見学者が減ってきている。 ○体育科の教員が互いの授業を参観することで授業力が向上し、それが生徒の体力向上にもつながっている。 ○年度当初に保健の授業を多く取り入れスポーツの話題に触れることで、健康やスポーツに関する興味関心を深めさせることが出来た。 ◆真夏の授業の際の運動量の確保や水分補給などについては、今後も検討が必要である。 ◆新型コロナウィルス感染防止対策を十分意識しながら、工夫した授業計画を立てていく必要がある。
「長欠・不登校」に関する取り組み	【長欠・不登校対策】 ＜学校生活アンケート＞ 「学校に行くのが楽しい」について肯定的な回答をした生徒の割合【90%以上】 〈学校生活アンケート〉 「悩んだり困ったりしたときに相談する相手がいますか」について肯定的な回答をした生徒の割合【70%以上】	○一人一人に自己肯定感をもたせるために、全教職員が生徒の良さに気づき、それを伝えるように共通実践する。 ○いじめアンケートなどを中心に生徒の状況を的確に把握し、いじめの早期発見早期対処に努める。 ○担任のみならず、学年職員、養護教諭、特別支援教育コーディネーターなどが連携して、不登校防止に努める体制を構築していく。 ○別室登校や家庭訪問などに関する場所や物資の整備を行い、不登校生徒を受け入れる環境を整える。	B	○生徒理解に努めるために朝の健康観察から担任が教室に待機することで、生徒とのコミュニケーションを深めることが出来た。 ○不登校初期の段階で家庭訪問や保護者相談などの様々な手を打つことで、改善が見られるケースが多くあった。 ○別室対応をできる範囲で拡充することで、数時間だけであるが登校できるようになったケースがあった。 ○教職員の報告、連絡、相談を重ねることで、教職員間の共通理解が生まれてきた。 ◆教員の間にも多様な考え方があり、対応方法に若干のズレが生じることがあった。 ◆別室対応の部屋の確保が限界の状態であり、今後どのように対応していくかが大きな課題である。
「業務改善」に関する取り組み	【業務改善】 〈校務支援システムより〉 一か月の時間外勤務が45時間以下の職員の割合【80%以上】 〈職員アンケート〉 「管理職が業務の効率化、スリム化による教職員の負担軽減を推進しようとしている」について肯定的な回答をした職員の割合【80%以上】	○月2回の定時退校日を徹底させる。 ○部活動においては、全市一斉の休養日、平日における週1回の休養日、土日どちらかの休養日などをきちんと遵守させる。 ○仕事内容の精選を図り、必要のない業務に時間をかけないようにする。 ○週1回の職員終礼を実施し、必要な伝達を行い、共通理解共通実践を推進する。	B	○職員終礼で共通理解を深めることで、他の会議の簡素化を進めることが出来た。 ○勤務時間外の削除時間について記録させることによって、職員が自己の勤務状態を見直すきっかけとすることが出来た。 ○部活動の休養日を遵守させることで、教員、生徒共に多くの面での余裕が生まれた。 ◆部活動における大会開催の関係で勤務時間外の在校時間がどうしても削減できないケースがあった。 ◆新型コロナウィルス感染防止対策に時間を費やすことが多く、その分負担が増えている。 ◆文科省が示す授業内容の重点化など、指導方法の工夫改善を行うことで業務改善につなげていく必要がある。
健康・安心・安全の取り組み	【新型コロナウィルス感染防止】 ・登校前の生徒の健康状態確認の徹底（全生徒） ・保護者との連絡体制の整備（全家庭複数の連絡先確認） ・学校内での体調不良者への対応（保護者との連携・休養室の確保）	○登校時間を8：10以降に設定し、職員が全生徒の健康状態を健康チェックリスト表をもとに確認する。 ○検温忘れの生徒は、昇降口前で職員が検温し健康状態を確認する。 ○各担任が教室前で再度健康状態を確認する。 ○電子申請システムを利用し、保護者への連絡方法をできるだけ多く把握する。 ○養護教諭を中心に、体調不良者を早い段階で把握し、保護者へ連絡を取り対応する。 ○空き教室を体調不良者の休養室とし、保護者が来校するまで他の生徒と接触しないような環境を整備する。	A	○職員の勤務時間を30分早めることで、生徒の健康状態を細かく確実に把握することができた。 ○保護者の意識が高くなり、登校前の健康観察が家庭においてしっかり行われるようになってきた。 ○朝、全生徒に声掛けをすることで教員と生徒とのコミュニケーションがより図れるようになった。 ○電子申請システムを有効に活用し、休校中の生徒の健康観察や保護者への連絡先の確認を確実に行うことができた。 ○休養室を整備することで、感染のリスクを大きく減らすことができた。 ◆生徒の同居家族がさまざまな理由でPCR検査を受けることになった際の、家庭からの連絡がやや遅れることがあったので、再度周知徹底したい。